

分科会Ⅰ 「多様な暮らし」「観光を多彩に」

日時：11月4日（木）19：00～21：00

会場：十津川村役場会議室

参加者：村内9名・村外6名・zoom 村外5名・アドバイザー2名

【自己紹介】

——村内——

・地域おこし協力隊。インバウンドの仕組み作りをしている。十津川村に来て2年。ここでの暮らしを実践したいと思ったので、今、暮らしの学び中。

・「空中の村」(アウトドア施設)を作り運営している。林業がやりたくて地域おこし協力隊で村に来た。村に来て5年。

・高校まで村に居て、44年間離れていた。父は林業、自分は今、農業。トライアスロン日本一の経験がある。

・今年3月、村役場を定年退職。今は介護しながら野良仕事。十津川大好き。「ムコダマシ」(在来種の餅粟)を持参。十津川村は米がとれなかった。この粟は白いので、婿さんを米だとだませるからこの名がある。今再び作られ始めている。

・谷瀬の特産として、純米酒「谷瀬」、ゆうべし、高菜漬けを作っている。(持参)今年から第4の特産品としてのサツマイモの干し芋等に取り組んでいる。

・55の字のうち、人が住んでいない集落もある。熊野古道なので他所の人は通るが。里芋(ヤツガシラ)で焼酎を作っている。

・結婚を機に村へ。中学・小学生の母。林業事務所に勤務しながら、村の豊かな自然を活かした森林環境教育に取り組んでいる。葉っぱの魚・マツボックリを釣り道具に見立てた玩具を使って子どもたちに山に親しんでもらっている。(持参)

・デザイナー。地域の子どもにデザインを教えている法人を起業。渋谷のIT企業でアプリやWEBサービス等。外国人ガイドも。外国人と地域の魅力を発見するプロジェクトで来村。その後も残った理由は、PCさえあればどこでも働けるので、自分の生き方や働き方をデザインできる実証がしたいから。

・神納川で地域おこし。建設業・椎茸栽培。趣味は釣りや村でできる遊びを。



——村外——

- ・和歌山県紀の川市から。昨年より「道の駅青洲の里」駅長。もと、市役所農林商工部長。谷瀬との関わりもある。「空中の村」に行ってもふわふわしている。
- ・静岡県掛川市から。市民活動で「栗焼酎」を作っている。洋品店。前日、谷瀬の寄り合いに参加、「自主自立」の現場にふれて感心した。
- ・県職員。奈良県立万葉文化館副館長。30年前、過疎対策の担当だったので十津川には週一回通っていた。明治の大水害の逸話を意識しながら。人口4500~600人の頃。定住人口を増やすのは難しいと考え「交流人口」に目を向けていた。今日は早く着いて以前補助金を出した温泉に浸かってきた。
- ・和歌山県紀の川市観光振興課 11年目。年中フルーツがとれるのを観光資源と考えDMO



に取り組んでいる。子連れで「ゆっくり散歩道」にも来ている。

- ・日本の文化を楽しく遊ぼうと「心葉」を主宰。歳時記、仏教美術を主に教えている。
- ・埼玉県越谷市より「スローライフ旬の店」で叔母の作った藍染めを売っている。父親の会社を継ぎ、PCやテレビの電子部品を作る工場を経営している。来年50周年、息子に承継させる準備をしている。

【暮らしについて】

- ・食文化が好き。自分は東北（仙台）出身、大学から東京・横浜・アメリカを行き来する生活を16年。在来種の「ムコダマシ」や「十津川高菜」が残っているのがすごい。この村は「暮らし」そのものが素敵。声掛け、野菜のやり取りなど、人にやさしい暮らしを自分も実践したい。日本らしい「ゆい」の文化を遺していきたい。
- ・都会より人が少ないのに都会より繋がりや交流が出来る。道普請や畑仕事で。人の交流と自然がいっぱいあるからビジネスの可能性を感じる。都会では何でも一人でやらなくてはならないが、ここは人の力を借りて一緒に歩いていく。
- ・「自然が豊か、和む」と村外の人が感想を。気候・夜空が綺麗・自然は自慢。本流が濁るのは残念だが。十津川駅伝があるのも自慢。戦後から66回開催した。村中が参加、北から南、翌年は南から北へと走る独特のルール。伴走もある。40チームが参加。村の大きな手作りイベントだ。
- ・日本一大きな村ということは日本一の自然があるということ。司馬遼太郎さんが「秘境」だといったとおり。世界遺産が2つもある。川もある。急峻な地形での暮らしは大変で畑を作るのも難しい。あの石垣をどうやって作ったのか先人に敬意をもつ。家を新築する際に、祖母が2年掛りで田んぼにした苦勞の歴史を知って、そこには建てなかった。
- ・サツマイモ掘りのイベントで子ども達の声がいいな~と感じた。谷瀬は4歳以下の子どもが7人、もうすぐ2人増える。子どもたちが増えた理由は、外からの人を受け入れたからと



思う。「ゆっくり散歩道」を作り、花を植え、「展望台」も集落の人で整備した。1ターンは5軒ある。

- ・この村には「あげる」文化がある。これを絶やさない様にしたい。自分は大根や白菜を50人の友人に毎年贈るために作っている。逆にもらう事も。急峻地でしかできない“ハコイ”（ほくほくした）ヤツガシラ（里芋）で焼酎を作っている。

- ・森林浴。マツボックリ。イベントでママたちが自然を介して繋がる。5歳児が1700mの山を登った。村の子は案外普通なので、ここの子どもは足腰強いと思う。

- ・朝から真夜中まで仕事をしているので、自分の辛さを発散してリフレッシュできるところが近くにあるのがいい。「空中の村」や、昼ごはんの後の温泉でひとつ風呂など。カヤックを購入したので瀬峡なども。夜空の綺麗さを知ってから今まで見えてなかったものに気づいた。近所さんが週2回位夕食を作ってくれる。日々感謝。今年は梅を100kg収穫して梅酒を作った。手作りした物を他県の友人に送るのが嬉しい。自分が変わっていく実感がある。

- ・大阪で4年の大学生活を送った。ここの自然や心意気、やさしさ、空気感を知り、伝えていきたい。ここには作られていない良さがある。そして無ければ作る。弁当に箸が入ってないときは枝で作る。それが当たり前だ。

【観光について】

- ・国内外に、ここの「暮らし」とその文化を伝えたい。見るだけでなく、暮らしを感じてもらいたい。神納川の農家民宿などはやっている人の高齢化が課題。次はどうするか。村には空白の世代があると思う。



- ・ここの特徴は村民との交流ができること。「自然」よりは「健康」「体づくり」の言葉を使ってアピールするといい。日本人は自然を無料で遊べると思っている。自然は整備し維持にはお金がかかる、その認識が薄い。自然は好きだが、虫は嫌、汚れたくない、は都合が良すぎないか。

- ・よその人は体力を使って心の癒しになる。農家民宿や週末の滞在・農業体験・地元のサポートなど、関係の組み合わせが農地の維持に繋がればと思う。

- ・「健康」を前面に出すアプローチを。温泉の効能は還元力。「健康寿命」につながる。癌に効くというエビデンスもある。もっと効果効能を謳って県とタイアップして「心身再生の里づくり」をしよう。十津川では当たり前の「源泉かけ流し」も、村外では貴重なこと。また花からのアプローチも。開花時期は短い、天然の「キイジョウロホトトギス」がある。調査している人もいる。天然記念物指定を受けるのは良し悪しだが。

- ・村での作業分、働いた対価や報酬がその人に得られるようにしたい。まだまだボランティアが多いのが課題。

- ・天然の「バイカオウレン」、杉林の中にある珍しい花が増えてきた。ずっと植え続けてき

た。1月の終わりからひと月間位に咲く。杉の枯れ枝を掃うのは大変だが、ネットの情報で300人位が見に来た。遠くは石川県や神戸から、6回目という人も。そういう観光もある。

・自然を活かした観光が都市部の人にウケるのは？

・観光の定義って何だろう。何かを見る？コンテンツ？名所？…総合的に魅力を伝えるにはコンセプトが必要だと思う。勉強の為に島根県隠岐に行った。『無いものはない』をテーマ



にしている。なるほど、暖かい人が居れば十分だ。滞在した宿泊施設も移住者が多く、働く場があり、村民の誰もが村の魅力を伝えられる。そのチーム力がすごかった。十津川もそうなりたい。

・様々な協力を得て着地型の林間学校や農家民泊を11軒でやった。高齢化やおもてなしの難しさで、今や2軒になった。「〇〇体験」を商品化したことへの疑問があり、今は「〇〇さんに任せる体験」にしたら…と思う。山をつかった遊びでも、その時の条件に合わせた

体験メニューが作れる。

・村は地域資源を活用するのが上手だと思った。松茸のピザや朴葉をアルミの代りに敷いた焼き方など。資源＝人だと思う。人の発掘やネットワークや絆を深めたらと思う。「谷瀬のつり橋」や「空中の村」で感じた“ふわふわ”を「ふわふわツーリズム」にしたら。

・ナツメが美味しいし、こげ茶色の枯れ葉が来訪者には新鮮。日頃は暮らしやすさや便利な所にいるが、果たしてそれが人間にとって豊かなのか考えさせられた。皆さんの様に逞しく生きれば本来持っている人間力が引き出せると感じた。掛川の地元民が組み立てるガイドサイクリングも参考になれば。



・30年前と比較して道が良くなり近くなった実感。インターネットとドクターヘリが必需で必然となった。そこでコミュニティーにどっぷり入って味わう観光や、暮らしが羨ましい。基礎的な暮らしと新しい人を受け入れることを両輪で考える必要があると感じた。

・20年前に妻とデートした谷瀬のつり橋は、何よりの地域資源だと思う。「空中の村」でふわふわ、山・樹木の神秘性と自然の恐ろしさも感じられる。厳しい自然とその中で暮らしている優しい人の心も地域資源。他所からお金をもらって盛り上げるのが観光？交流でウインウインの観光もあるはずだ。人の良さや個性を前面に出す観光の意見に賛成。

・“村内”の枠の中にも、元は外からの人が多い事に感動した。コロナ禍で“満足”について考える機会が多かったが、自然にも人にも“感謝”があり、感謝が深いから強さと優しさを私たちが感じた。作り出す、その道具からも作り出すことがすごい。品物・働き方・動き方…同じ人間としてたくさん考えることが出来た。

・村に入ってから、皆さんの一生懸命さをひしひしと感じた。心打たれたのは薪の風呂。申し訳ないという感情がでた。お顔や発言には気を張らず飾らない雰囲気があり、それが私たちには心地よかった。



【アドバイザーから】

8年間通っている。学生を受け入れてくれる。決めたことを実現する力がすごい。皆で力を合わせてやる技術がある。買うのが当たり前の物を作ること、技を知った。生きる幸せって…と考えさせられる。学生も観光に求めるものは変わってきている。見て確認するだけの旅行より、そこで何ができる、どんな人に会える？の意識。村の人と交流したい、話が楽しい、うまく話せなくても、暮らしの中のちょっとした会話が次につながる。どう伝えるかの工夫が出来ると良いと感じた。外の人をうまく使っていく。接待だけでなく、体験と共に“お手伝い要員”にしていくことも大事だろう。